復讐奇談　安積沼

四

へ13
182
4

古今 182 4

（小幡小平次死霊物語）復讐安積沼　巻之四

東都　山東庵京傳著
門人　拝田泥牛校

第七條

暗夜避狼兒左九郎悞行事
幷
小平次於安積沼淹死事

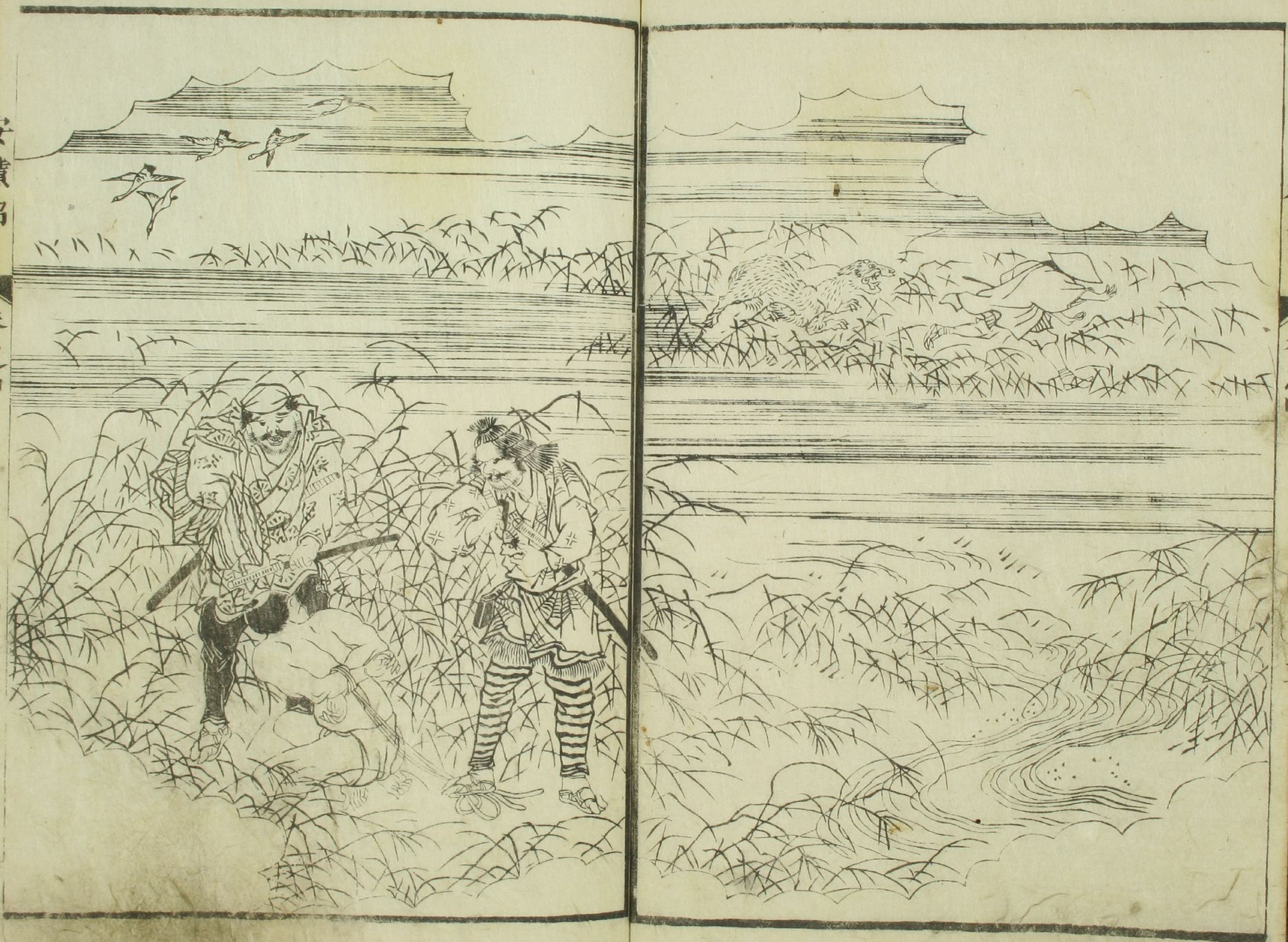
さても又小幡小平次ハ。俠布里の芝居をはて。飯路にこゝろざしけるが。又安積郡笹川の宿に芝居ありてやとはれし。權且此地にとゞまり居けるよし。江戸に殘せし妻のもとへおとづれけり。彼鼓打安達左九郎此よしを聞て忽心中に一計を生じ。俄に旅裝をとゝのへて小平次が逗留の地笹川の宿をこゝろざし。芝居のもてぶるうらふとも心せかれて。只獨夜を日につぎてたどりけるが。なかなかまだ枯む栁道の辺乃清水もいとゞつれなく白川の関阿武隈川

もむなしく飢て夜るをいとへど。小田川の宿化地蔵をさして。足掃坂ゆぞきしかゝりぬ。此時しも十月のなかばなれば。ゆきゝの旅人もまれ〳〵にて。夜の三更の頃なれバ。更に人のゆくゝれもなく。只群を失ふ孤雁天に鳴て。よぶのゝ山〳〵のさゝどうひゞきわたりけるひまで。わのよんすしにとさびしく。そゞろに寒風襟袖に吹入れて。身のびかたく。饑にさへおかされて十分の艱苦をうけ。やゝもしら道も急ぎける所に。枯尾花のむらがるうち。僥にうごくと見えしが。忽然一隻の狼をどり出て。鼻をならし牙をならし勢ひをふるひて跳かゝる。左九郎大におどろき。脚をそらにして逃去りけるが。不狼ハあとにつきて跳かゝれバ。命ときハおもきり。たるなしきころをとらんど。十余町逃のびておとそろへけるに。狼のちかづき見えざりけれバ。やう〳〵魂魄におちつきをおぼえ。流の水に咽をうるほし。息をやすめける時。肩にかけ

たる包のなきに心づき。扨ハ彼所を逃去時。おとしてきたりけるならんと。これよりするべし。包のうちにハ衣服のるいが。わしの路費をはさみ入れされども。再彼所にゆきて拾ひきたらバ。又狼のためにあやうき運ありけれバ。命をうしなふこともあるべし。わしの路費衣服ハ。命にかふべき宝にあらず。此處より笹川の宿まへ。ほど遠からざれバ。腰の一刀を賣てあらん。ゆくべしとおもひさだめ。迷街道に出て宿をもとめんやと。四方をながめけるに。此邊ハ却て乱草迷離。露濃なる廣莫にて。狐兎の踪あるのミ。只一條の径路もなけれバ。人のかよひたるあとをしたひのびつゝ枯草を推わけて。やゝとうちを索るに。僥に時雨さへそゝぎ。暗くして東西もわかたざれバ。只呆て居ける所に。茅屑頭巾をかぶり。大腰刀をおびたる一人の賊人。乱草のうちを走りきたり。一言をいはず左九郎にむかひて衣服腰刀を

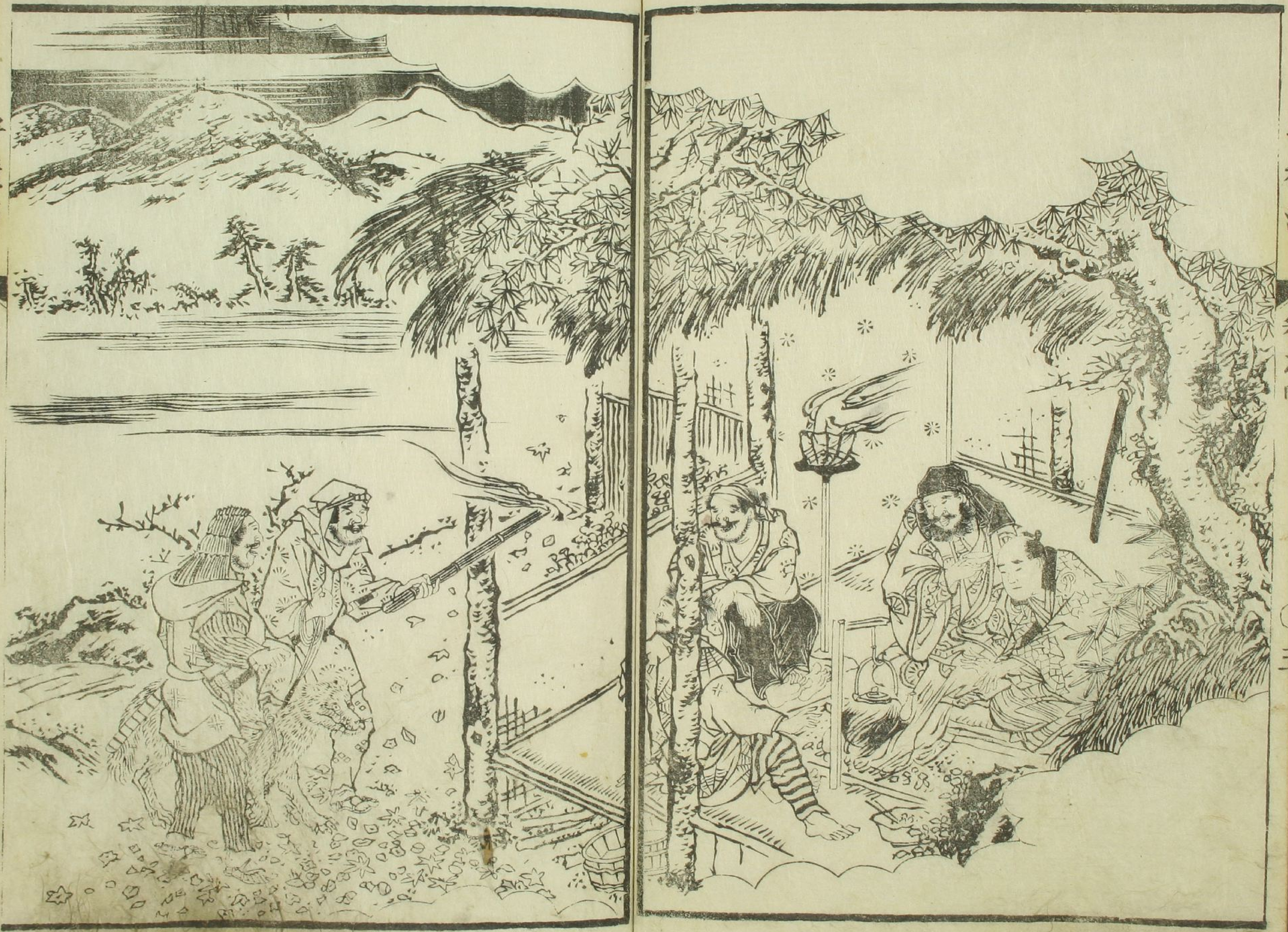
うばひ。赤裸にして高手小手にくゝり。一人の賊左九郎が背を搔撫らとすで両の腕両の脚をさぐり。眼口耳鼻十の指までをよくくあらため見て。此老耄疵もて灸の痕だになし。又なき活肉ぞといひつゝ。悪賊いとよろこべるさまにて引立てゆく。憐むべし左九郎は三途に迷ふ罪人が悪鬼羅刹にとらはれて。閻魔の廳にひかるゝに異ならず。とても彼等に敵することかなはざれば。只死生を天に任せてひかれゆきぬが。やがて三里ばかりも去しと思ふ比。とある森のうちなる。一宇の灯の光りをかとろに閃めく的に。両賊足をはやめてあゆみよりてゆきぬ。彼が左九郎は只心中に仏を念じて死を待のみなり。正是猪羊屠宰の家に入。一脚踏來て死路を歩といふさまにて。いとあやふくぞみえにけるが。とある林のうちにいたれば。家に壁の骨あらはれてうちよろぼひ

たる破敗家ありて。ふかくおち葉にうづもれ行ぬ。彼両賊左九郎をかきかゝへつゝ空屋のうちにつれおき。彼衣服腰刀をはぎとりて正屋のうちにいりぬ。左九郎は今も殺さるゝかと身ぶるひ居たるが。あやしくありて前の両賊のうち一人明松をとりて前にさし。賊の頭とおぼしくて色黒く晴光り月代長くのび髭しげく生ひて頤も繪にかける張飛に似る大男。長き刀をおびつゝ後につきて空屋に來り。小賊がさしてる明松をとらせ。ぐつと左九郎が面をてらして。犬れ我が縁き。汝は東石軍蔵みてはなつかしさうにいふ。左九郎は我前の名をよばれてあやしく驚きぬ。此大男をよくくみるに。姿は前とことなれども。まぎれもあらぬ兄の東石雲平なりしが。地獄にて仏にあひたるうれしさ。さりとも兄雲平殿にてはおはさずやといへば。雲平がいはく。我今手下の者が



来る腰刀に見おぼえあれバ。おやしみまもりて客に来りしを見しれ。果して弟なり。おやに似しといひつゝよろこび。いましめをときて正屋にいざなひゆきしが。三里余の道を赤裸にて寒風に吹れ。渾身紫色になり氷のごとくにひえきつたれバ。いそぎ衣服をとりて着せ。炉火のうちに木の葉をくべてあたゝめ。あたゝかなる酒食をあたへければ。只甦るおもひをなし。漸く人ごゝちになり。雲平にむかひて六年以来おとづれも絶ぬれど。いかなる世をわたりしと心をくだきおもひ居しに。恙なくありてよろこびにたえずといへバ。雲平ハ房州にて安西喜内母子を殺し。彼地を出奔して後。奥州に逃下り。剣術指南をして所々方々をめぐり。津軽の海辺外が浜に至りしが。今は天下に一をあらそふ四人の賊におくれ

きてつひに賊の頭となり。此処ハ街道をはなるゝこと三里余にして。四方二里が間都て茫々たる曠莫にて更に人の往来なく。外にハ只一軒はなれ家あるを幸に。此去より此空家をうばひてかくれ住み名をとなへて魔頭二といふよし。ちかごろあとりをつゞらにくゞりけるが。左九郎ハ今姓名をかへて芝居の鼓打となり。笹川の宿に芝居ありて赴くとて。此萩夫婦坂にて狼に出合て包を奪ひ。乱草のうちにおいて両賊にころされける。其屍を埋られたり。おのれかけざる対面に。ふたゝび無事をよろこびぬ。雲平又いふやう。汝ハ命づよき人なり。其狼をとゞめしも。我手下の者の所為なり。我等一匹の狼をやしなひおき。食を減じて餓しめ。手下の者にひかせて夜々街道にいだし。旅人に狼をけしかけて嚇し。其間に衣服



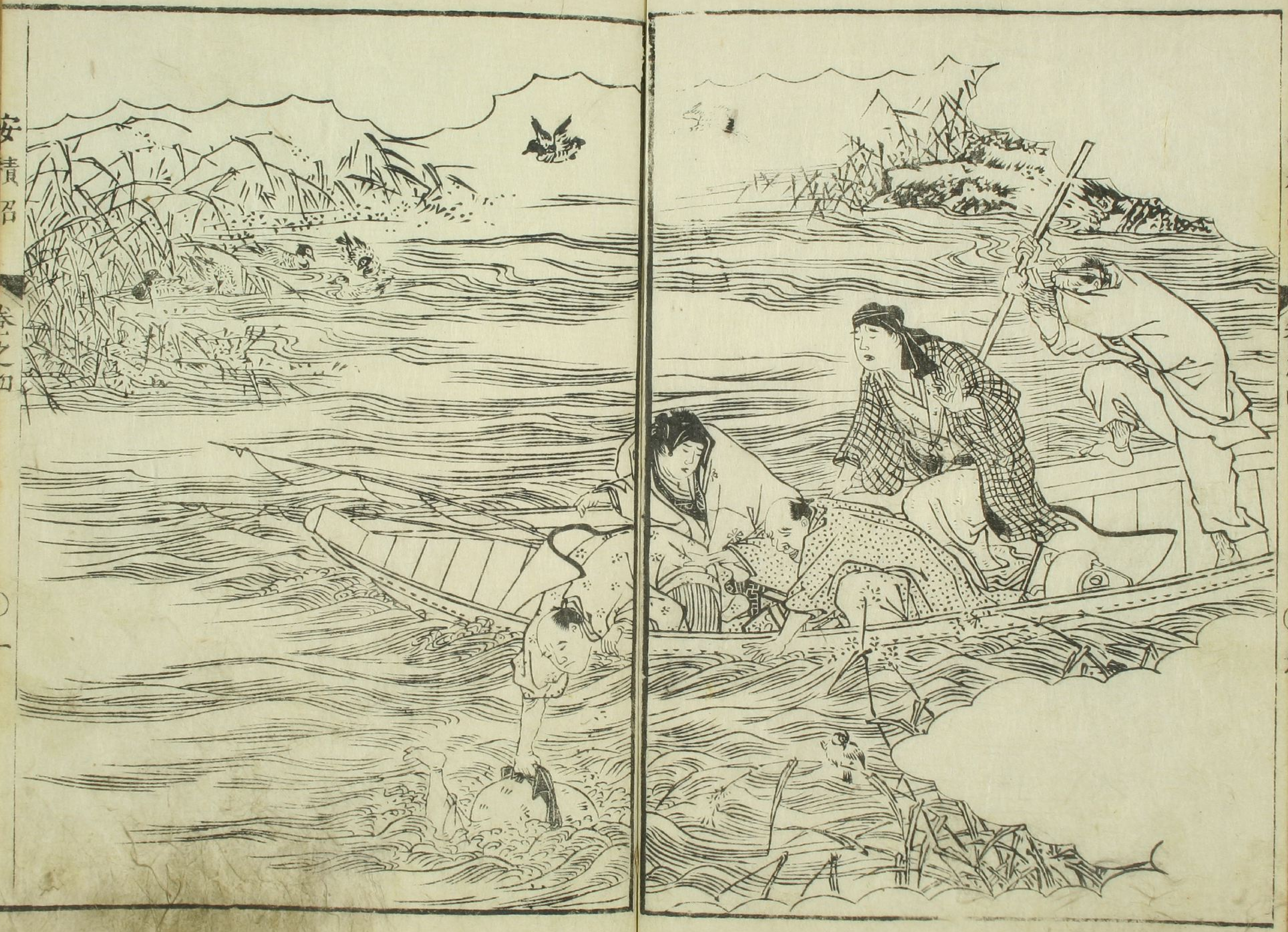
て饑荒をしのぎてあらむことも益なし。今夜も手下の者を指とさして
街道に出しが。汝が出合たるは是なり。もし運つよくば狼の餌となるべき
に。却てよかりしすまり。又男女にはあらど渾身無疵なる者といけ
どりて賣つるは主所あり。これはたれいたれあるにとふて一席の談に志
がたし。手下の小賊等汝をいけどりしはこれにすちうがさかなり。
我汝をころさば小賊等は怖せ服さて明日も彼所に賣つ
るは必定。非命の死をまぬかれ運つよきよとかへりれば。左九郎
は弟をふみはして押そればさしも兇人の小賊敵り兼ぬ。一人は狼
をひき一人は包を肩にかけかうていかく。此所に速てよく仕合なし
きれ何事ぞ一人がいくそのなすよ。賭銭あれ利を見い好結あれ
いで行れど。今夜もまれあるしの物をえられども。包の裏にあるか

し。かくてこゝろよく酒ぞふ飲ざらしといひて。狼を門口の枯
木につなぎて裏に入る。雲平声をかけ。汝等は夫婦故あて包
をえざるやと云ぬきて。此両賊等何とせるするとさぐりみや
しりあへぞといひていづれれば。雲平左九郎がすをかうて。此
両賊にきかせ。彼包と前の腰刀をとりて左九郎にわたし。兇
弟二人小賊に人炉火のめぐりにすしび坐て再酒をあつらめ。む
らしく数杯をかさむけてたのしみけり。此に人の小賊は。胡猿五郎
鰊八。鴉二郎。鵯二といひて。みな海賊なり。雲平が大膽強力なし
て。よく剣術に達しけると服て。そくめて頭とすし。おのれ等手下に属
せしとぞ。かくて冬の夜の長きも。兇弟がつゞる物語に時うつりてはや暁
にちかくなれば。左九郎は再来りてまみゆべしといひて。別を告

てはしり出んとせしを。雲平一人の小賊に令じて。街道の出口まで
おくらせければ。左九郎心やすく街道へ出て小賊とわかれ途を
急ぎて其日の午ごろ。笹川の宿にゆきつきて旅宿をとりぬ。
芝居ハいまだはじめざれど。近日興行のよしなれバ。先よろこび。一座の
者の旅宿をたづねて。小平次をたづね一座の者にあひ。頃日まかりいで
するによりて。おのくを的に来れり。初ハかくれ当所の芝居にやとはれて。
さすれバあひともさきよしといひてさのみぬ。幸小平次頭取なり
けれバ。芝居主にかくし告て。左九郎を引合するに。折よく雑方を
人なれバ速にうけあひて。雑方のうちにぞくれける。此頃ハいまだ続狂
言といふことなく。海道下り。新発意太鼓。佛舎利。谷中六方。ふさ
め狂ひなどいふ狂言にて。其余ハ小兵踊のまぎらハく。教要といふものか
けれバ。立役ハ白髪を茶筅にゆひ。紫帽子といふものもかけたれバ。女形ハ
黒絹のきれの四角に紐の緒をつけて。かつら帽子となづけ。これを冠て月代
をかくし。女の体裁にとりなし。衣服ハすべて木綿にかぎり当所のおやま。江
戸祢宜町の芝居をうつすにかくのごとくなれバ。田舎芝居の粗略か
るすハ推て知るべし。折かどの芝居さだまりけるが。雨天つゞきて
休日おほく。窮く旅宿にありて徒然をうらび。俳優の手すれバ。遊
藝ハ家にておもしろからねど。近辺に安積山。安積沼。葛の松原。信夫
山などいふ名所ハあれど。むかけとバかんにもゆけど。只酒食をむさぼり。
碁将棊なども気を慰めてゐけるが。中にも小平次ハ酒も好まず。
碁将棊も知らざれバ。つきて退屈するを。左九郎見てとりて。
小平次にむかひ。これよりほど近きに。安積の沼とて大沼あり。

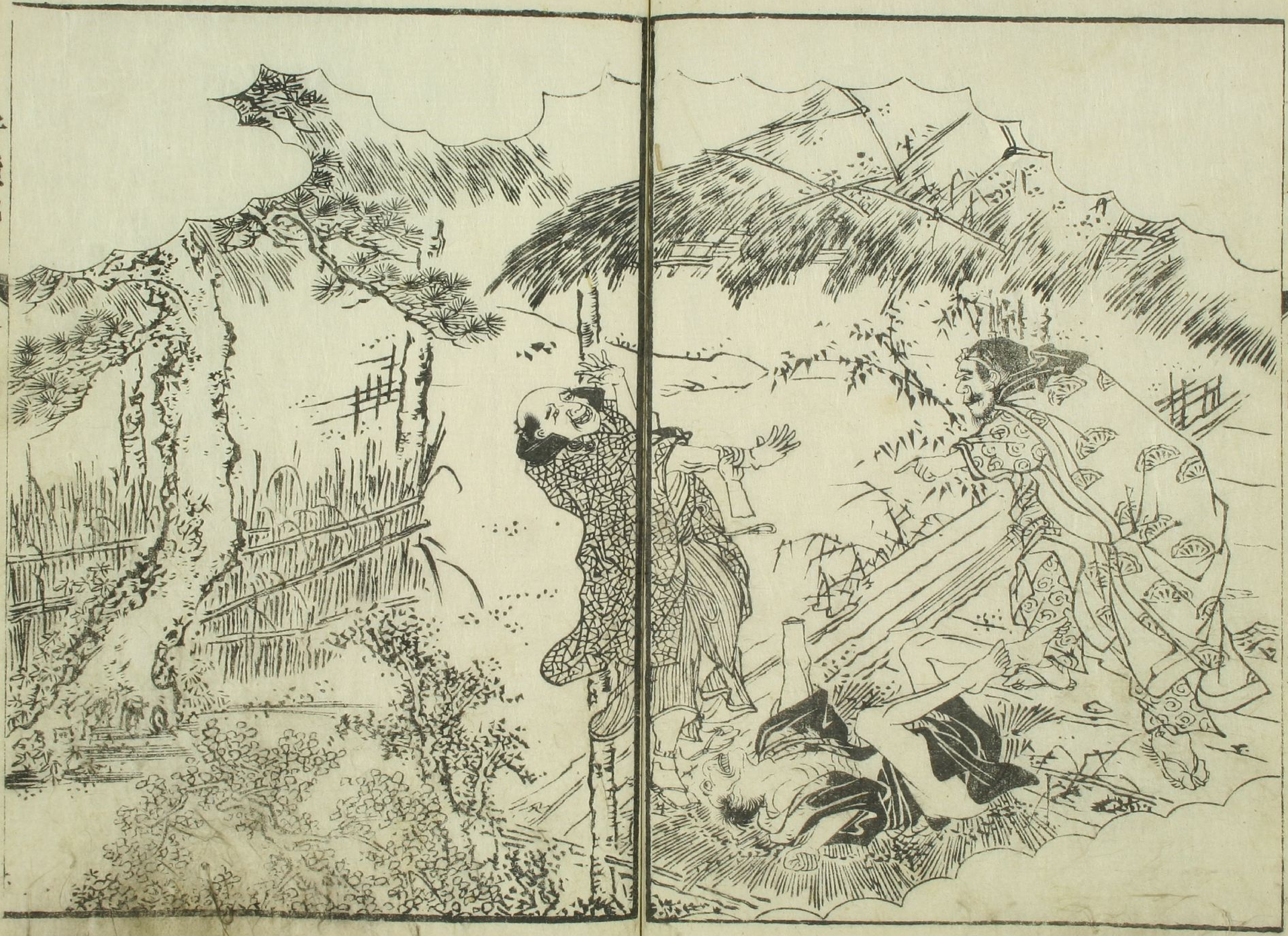
魚をかくしときゝしが一面せしゆゑ彼ふ小舩をうかめて沼をせんさくせんといひてともむ。小平次ハ素郎ざまなれバ大によろこび。我はすれんとつげうしといひつ。人といざなひ手彼ふ〳〵ゆきんとするをりふし。かゝる二三人口々にとゞめ。我等人のかゝるをきゝしれ。彼沼ふハ主ありて魚族をもしく。網とかけし釣とるる者あれバ必祟これあれ。もし魚族ハ別ふもあるべし。此俤しへ主人といひてうやむ。左九郎聞て與第ハいそでうさることあらん。このごろ足下等の食しおふ魚ハみなべて彼沼より里人のとりきたりてあきなふものを。里人も怪ずく。他国の人ふのゝ怪あるべきはずなし。それハ畢竟里人等。彼沼の魚鼈を郷の人ふとらせまじとおもひて。妖を言なす。何の怪ことかあらん。

幸雨もやみぬ。雨後ハ魚も饑てよく釣鈎にかゝるものなり。いざ〳〵ゆきませよといひて。しきりにさそへバ。小平次ともしろ。其余女歌の右近源二。立役の多門庄三。説経かたりの天満八助等をいざなひ。総て五人彼子小竹笛すべのものをたづさへ釣道具ともとりもちて。かの沼にいたり。小舩をやとひて乗出しぬ。抑安積の沼といふハ。みちのくの安積の沼の花かつみ。かつみる人ふ恋やわたらん。あやめ草ぞしくまもよみくちきし根のいはぬそかくれ沼ふ生ひけん。すべ古歌ふもよまれてみちのくの名高き名所なり。此時まではひろき大沼なりしが。漸々にうづもれて今ハわづかに残れり。かくて五人の者ハ船中より四方をながめれバ。沼ふ臨める安積山を一眼に見あげ。時しも末の秋なれバ紅葉して。雨後の景色ハさしもいろふかくて朱をそゝぎたるごとく。花



ろく。菖蒲草。燕子花のさかりて。かしこは枯葉すがら一面に影を浮して。夏の頃は蛍もさぞしおもしろからん。鴫鳴さわぐの水鳥の栖べるさま。ひまなく飛もさまぐに目をよろこばしめて。ゑもいはれざる好景なれば。大に興をおこし。沼のさなかに船をとゞめて。破子小竹筒取出し。酒くみかはして酌とくぐしけるに。左九郎がいふに。よしなんぞ。めづらしくのまんお肴の魚を捕らんに。後は酒のむ事も打忘れ。只網をおろさんとして余念なきおりしも。小平次大きなる鯉を網あげ。魚船中にとゞるとぞ。よしとやくおさへんと。逃をことすれといひて。えさらざる時に。小平次あやまりて船べりをふみはづし。うつぶせになりて水中に撞とおちいりければ。驚騒ぎさそれとけよといひてさまぐ。左九郎猿臂を伸して。小平次が帯のむすびめ然とらへてひきあげんとしけるに。帯はふつにときれて手に残り。小平次は水底に沈みかくれぬ。驚き是を救はんとあへて漕ども。櫂をとりて水中をかきさがしすれども。此船は沼のまん中にて。更に水ふかく。いかんともすべきやうなければ。驚て面色土のごとくに変じ。此沼に主ありて魚捕をとむるをいふならむにや。かゝるこれは妖怪の所為なるべしと思さそれおそろしくなりて。網する魚をのこらず沼中に捨て。急ぎ船をとくくして岸に上り。水練に達したる者を二三人やとひて水中をあまねくさがさせけれども。屍を得ざるによりて。ますます妖怪の所為なるべしとおそれをなし。左九郎等四人瘧病に臥り。又沼中をさがさせとかく。まつも三日が程を経ぬれども。つひに屍をえざりしかば

今はせんすべなし。飛脚をつかひて江戸に告知らすべしと。お議する時。左九郎腰刀を抜て己れ自殺してんけれバ。皆々驚さこハ狂気しつるとおもひて押しとゞむ。左九郎吐息して我狂気ハせざりしかども。畢竟彼をとゞめて彼が雲切を失ひしめたらんハ。我おこたりなり。江戸に皈りて彼が妻にあひ何のいひわけあらん。我自殺して小平次が死路をともなひ。泉下にいたりて朋友の信をあらハさんといふ。跡のこりし人々これをとゞめんといひて太刀をとりあげし。しかれども何やうにもえたると。暫く立かゝりて漸く刀をもぎとりぬ。同船したる二人の者かたりぐいひけるハ。小平次が水死ハ自あやまちなりしかバ。足下のつみにあらねど又足下死したりとも小平次再生をとぐべきこゝろもなし。彼が妻ゆへ我等よりさにいひ足下むしろのあやまりゆゑならず。足下死なれバ我等も同船なりしかバさてハ皈りがたし。かゝる凶事のいできたるも。皆妖怪の所為なるべしと。こゝろを尽してとゞめけれバ。左九郎ハやう〳〵刀をおさめ。ふさぎつゝ嘆息してぞ居たりける。やゝありて左九郎いひけるハ。しかる上ハ飛脚をやとふにおよばずと。我自江戸に皈り彼が妻に此事を告て。其後追薦仏事をもいとなむべし。片時もながくとゞまらんといひて。其日の午なる比ワ村を立ていでける。此左九郎が奸計にて自殺せんとせしものゝちくの疑ひをおそれんためなれど。あとに残る者どもハそれとハ夢にも知らず。彼ハ朋友の信を知りたる者なりと。暗に譏るこそ愚なれ。かくて左九郎。其日の暮るゝ比雲平が隠家にいたりぬ。雲平ハ



小賊ばらとともに酒を飲て居たりしが。さぶらふうちに入り。計略の術ありて我日来の望をとぐること。偏是又とぐらん。しかるになかりしといひて。謝しければ雲平笑ひて。是等の小事何のかしこまりあらん。先くつろぎて一盃とくむべしといひて。巨杯をかたむけしけり。抑左九郎小平次が妻お塚と密通し。折をゑて小平次を失ひお塚を我妻にせんとおもひ居しが。小平次当國へ数日逗留とすれば折なし。旅中にて毒殺すべしとたくみ。毒やくを懐にして当国に下りしが。おもひかけず雲平にめぐり合。目前のついでけりなば毒殺せんのちはくるしからじとおもふべしと。て別に一計をまうけ。雲平ハ元来水練の達人なりければ。手下の者どもハ原海賊にて水中を陸地のごとく思ふ徒なれバ。雲平二

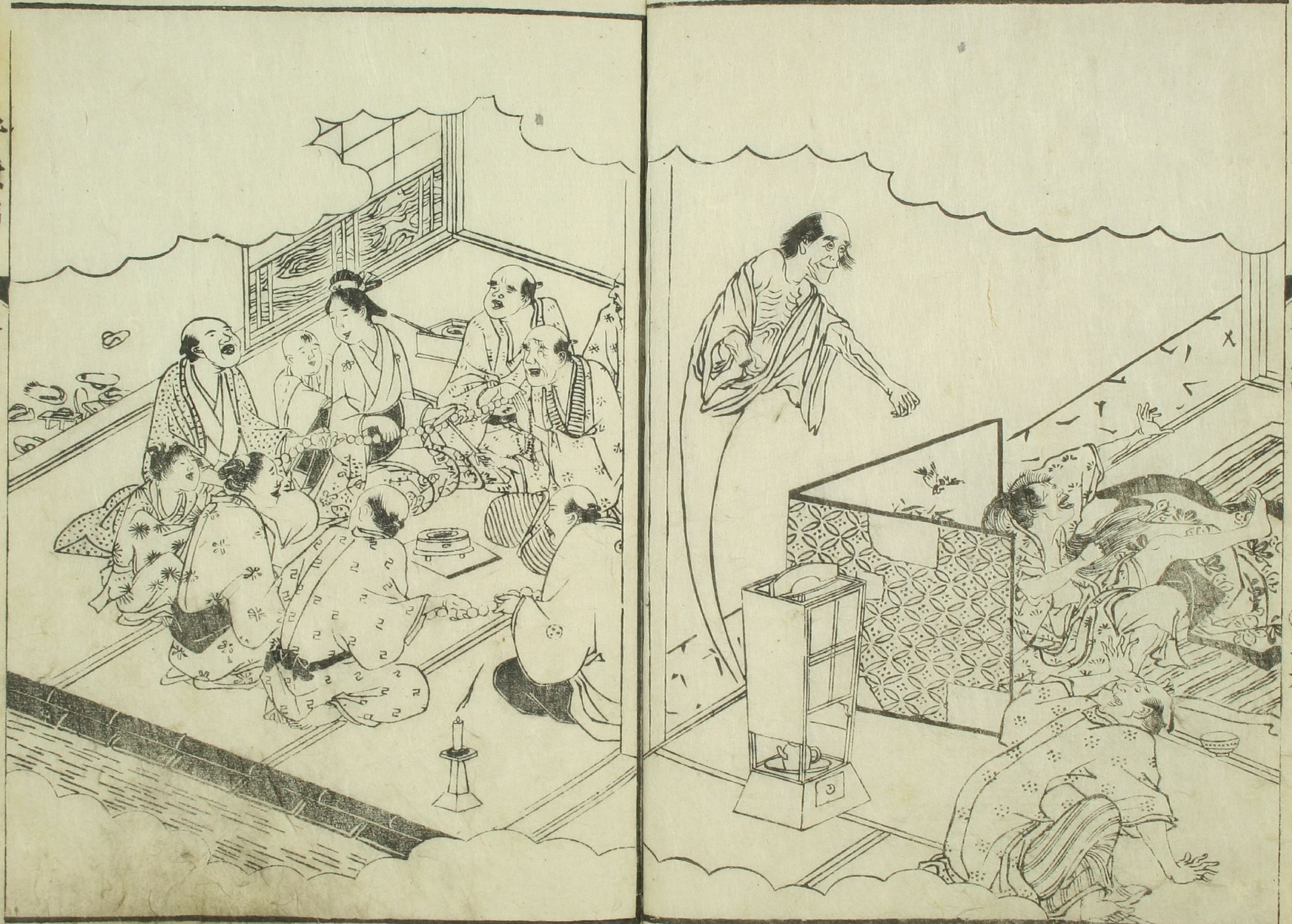
あなやと叫びてたふれ死せり。その声正屋にきこえければ雲平何事ぞとあやしみ刀をとりて走り来てみるに。左九郎ハ小平次が死骸にいだかれ絶入て居たりければ。遽引起さんとするに小平次が死骸もまとひて起上りね。おそひてよりくれば。小平次が手にて左九郎がくびをにぎり居たり。これをとりはなさんとすれども力ときはめてはなさんとすれどもはなれざれば。雲平気をいらち刀をぬきて小平次が手くびを斬放。小賊をよびて左九郎を抱せて正屋にうつし醒薬をあたへければ漸く甦醒たるが。きりはなちたる小平次が手くび左九郎がくびに残りて。はなれざりしかば。せんかたなく五ッの指を一ッゝきりおとして。やうやくこれをとりはなちぬ。九郎ハくるしみにたへかねどもに小平次がにらみたる眼ざしのおそろしさ。すがた目さきに残り

てうちわなゝくを見て。雲平呵々と笑ひ。汝ハ膽のさゝぬ者かな。彼奴がしれうらみを咽もとも。何のおそるゝことやある。必臆病をなさざることなかれといひて。小賊等に令じ。屍を家の後なる古井のうちに捨させ。斬放る袖ハ彼狼にあたへてくらはしむ。折しも遠寺の鐘声耳にひゞきぬ。はや四更のころほひなれバ。程なく房間に入て歇り。かくて左九郎ハ。次の日未明に發足して。江戸に皈りぬ。唐山の古言に人可瞞天不可瞞といへることあり。左九郎が毒悪つひにその報時あるべし。且次にしるすを見よ

第八條

小平次寃魂害姦夫淫婦事
并五指五金終有レ報事

かくて左九郎江戸に皈り。さぶらに小平次が家に至。暗に彼が妻お塚を人なき所に呼出して。路中にてゆくりなく。雲平にめぐり合しより。計らずも安積沼に於て小平次を殺し。おもひかけぬ金子を得たるまで。始終をつぶさに説ければ。お塚つぶらに聞て。小平次ハ旅宿にて病を得るがおし快きによりて。人に先だちて皈来しとて。痩衰て昨夜家に皈り。つく草臥しとて。其儘房間に入りて眠るが。扨も食ずして今に起出ざるに。左九郎聞て。そハ怪事なり。彼れきこえむべしとて。お塚もろともに房間に入りや。やをら屏風をおしひらかんとせし時に。裏より後くわそるまくひとさしむし。屏風をかゝえて引かんとせしに。裏より屏風の縁にかゝりける五つの指。ぱら〳〵とこぼれ落て。屏風ハおのづからひらけ。裏にハ人影もみえず。只臥具のうちより。一團の陰火まろびいで。引窓を越て

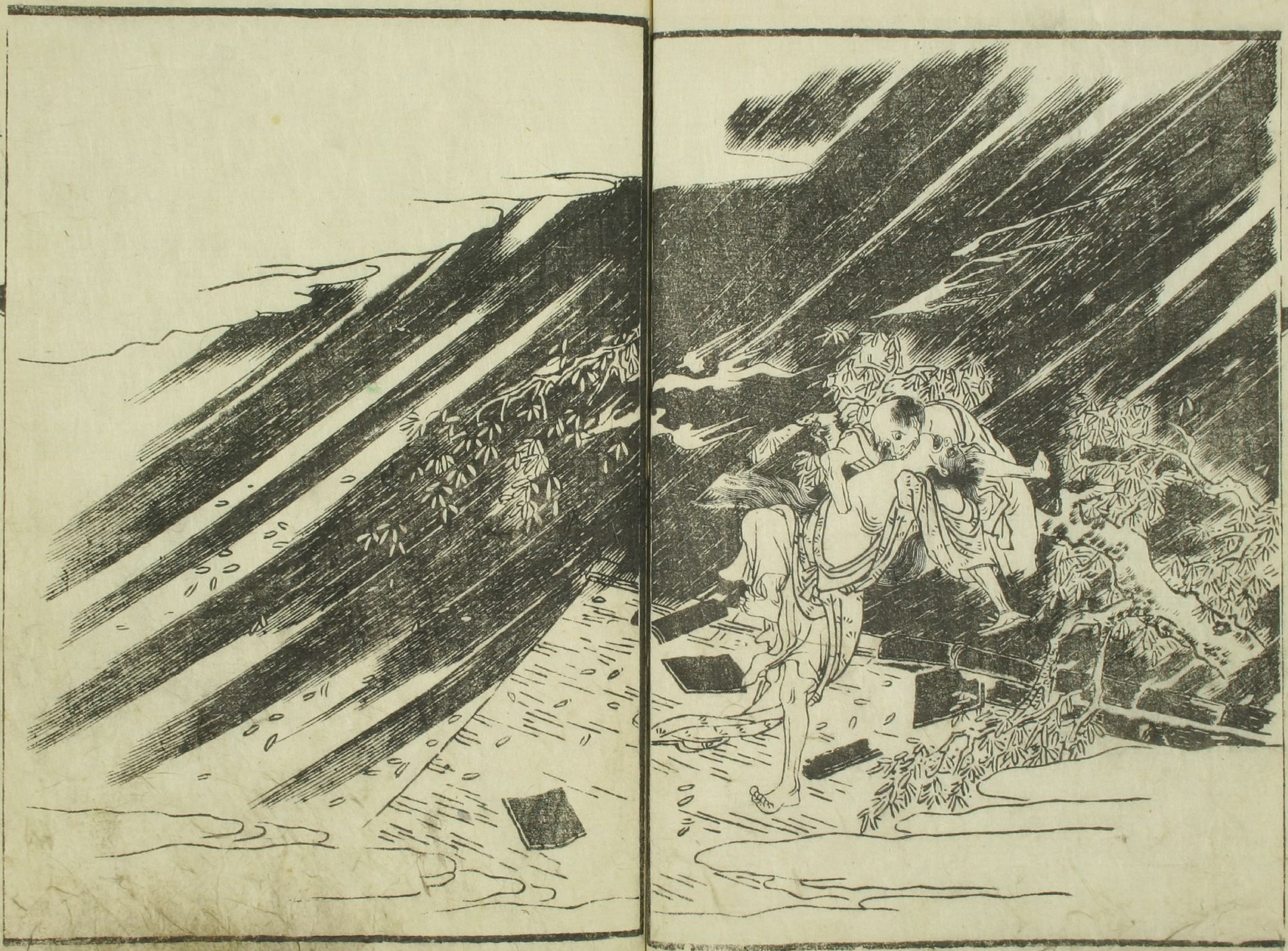


飛去ぬ。彼こぼれたる指ハ肉腐て臭氣あり。死して日を經たる人の指になぞありける。左九郎ハこれをみるよりも膽を飛し眼を閉て伏向に臥をお塚ハいと膽のふとき女なれバすこしもおそれず。扨ハ昨夜飯米しハ小平次が寃魂にてありつるか。これぞろの怨みあるべき筈なり。今更に何の驚くことかあらんと左九郎が方をみやりつゝ。詞を励せていふにぞ。左九郎も彼が丈夫の志におぢてやゝ心をおさめ。雲平が隠家にても怪事ありしなど説て。此日ハ且別去ぬ。扨前に玉川千之丞が養子となりし。小平次が兒子小太郎ハいまだ幼年なれバ用にたゝず外に小平次が親族なる者なかりしかバ。左九郎お塚をさそひ。追薦仏事をいとなみて人の疑をおもひ。中陰のさるをまち。媒をたのみ小平次が家に入りてお塚を妻となし。両人日来の望をと

げてよろこぶこと限りなし。これより後ハ無事にてあるべきこともなし。扨かぞふれバその年もくれてあらたまる年となりぬ。小平次が寃の念も絶しにや。忘れてくらしけるが。一夜夫婦房間に眠れる時。誰ともしれぬ男左九郎とお塚が寐る間にわだかまりて臥居たり。左九郎偶ミ心つけてあやしくよく見さだめんとしけるうちに。かの姿ハきえうせぬ。これより後かくのごとくにて。或ハ三日に一度。或ハ又日に一どあり。左九郎妻の心を疑ひ独胸にこめて心をつけしに。後にハ毎夜きたるなり。心中ますます疑ひおもひけるハ。我妻人と密通し家内のねふるをうかゞひて姦夫を引入るゝとおもひ。彼原來と密通しながら夫婦となりて。わづかに一歳をもたざるに。又別人と不義をなすこと。さりとハおそるべき淫婦なり。計を

俟てたしふゑんさゞりか。此仇を報ずべしと。心中にうなづき。[illegible]心をゆるさで居たるが。一夜人のもとにて酒をたうビ。[illegible]浪々蹌々として家に皈りつゝ。時は二更のころおひにてもや樞をさしかためされしバ。戸をたゝきてひらかんと。[illegible]の垣を越て忍び入る者あり。暗夜にて物のあやめハ見えざれども。かねてこのごろ妻のもとに其奸夫あれが。今夜こそ彼奴なれ報のかどなるべしと。おのれも垣を越てうちに入り。暗所に身をひそめて窺見るに。果して彼者房間に入り。妻とゝもに臥けれバ。左九郎ハ酒氣をおびたるうへに。此光景を見て。忿怒心頭に起り。腰におびたる一刀を抜て。四段になれと斬つけたり。妻ハ驚き目を醒し。賊あり〳〵とよばひて[illegible]刀を[illegible]れバ。

忽五ツの指悉くきれおち。鮮血淋々とながれて。一声あなやと叫び。のけさまに倒れて死入りぬ。姦夫とみえし者ハそのまゝ姿さへうせて。只家棟に呵々と笑ふ声して。ふたゝび音もなし。扨ハ我閨に姦夫とみえしも。小平次が寃魂にてありしを。左九郎ハ夢の醒たるこゝちし。力をそへて妻を[illegible]。やうやう氣ハつきぬれども。日来膽ふとき女なれど。妖崇のために心氣うばゝれ。此時より心乱[illegible]指[illegible]漸々に[illegible]氣力日々に[illegible]。昼ハ[illegible]てよくねぶれど。夜ハ三更の頃より苦しむこと毎夜なり。かくてハ終に命とらるべし。妖崇をはらふるにハ仏神をたのむにしくハあらじとて。近邊の人をあつめ。百万遍といふことをなして仏を念



卜巫伏をまねひてさま〴〵の祈祷をなせども。露ばかりも験なし。さればこそあやしけれ。さらバ一日破れ垢つきて見苦しき衣服を着たる一個の祝部。鈴をならし祝詞をとなへて門にきたり。手のうちを乞ふ。左九郎あるじ速出むかひておひ入れんとするに。祝部肯ずもいれど。頭を擡て見まはし家裏をとさしのぞく。左九郎あやしみて汝人の家内を窺ふハ無礼のいたりなり。速に去ねやとあらゝかにいへども。なほ窺ふこと前の如し。いよ〳〵あやしく。汝我家をさしのぞくハ。必相聯顧ありて賊ども入べき底心やあらん。拳をうけざるまへに速去ねやと喝ければ。祝部いろを変ていふ。我此家を窺ふハ家を相せんが為なり。この家のあるじハかならず陰悪を犯す者なり。家相にあらはれてあれば

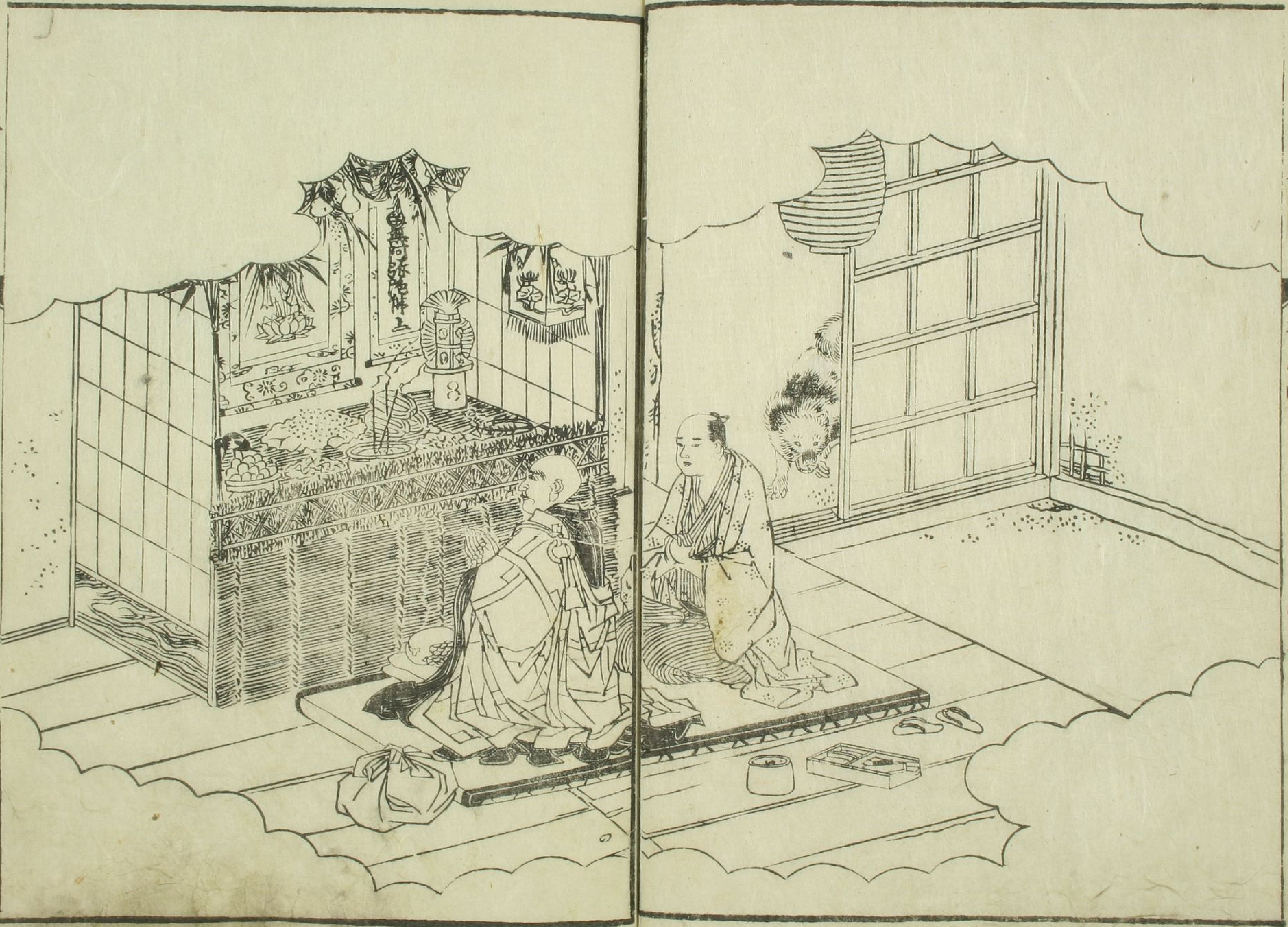
なり。汝むかしあるじすらがんにおかしたるべし。さらバ我を賊とよばるゝハ何のことゝぞ。又家内に妖気みちて冤魂の妖祟あり。汝が亡ることとほからじ。憐むべしといひて去んとす。左九郎大に驚き袖をひかへてひざまづき。恭礼をなしていふ。さばかり前方と知れど。無礼のことゆるしつる偏にゆるし玉へ。今のたまひしにたがはねど。家に妖祟あり。妻なるもの是に苦しめられて。已に命あやうし。これをとくべき術あらば何とぞ施し玉へと乞ふ。祝部聞てあざ笑ひ汝前に我を賊とさし。盗人に何の霊験ありてか人をすくふべき。汝只手をつかねて滅亡を待にあらじといひつゝ。又去んとするを。おひてめ妻の病床にいざなひて。ひたすら救ひを乞ければ。祝部今ハ不便なりけん。やう〳〵うけひきて病人を相し左九郎を相し

ても夫婦これまでのおこなひ甚よからねど生曆斷。死曆斷。ふた
つの國律罪を犯せり。もし罪を悔て汚穢不浄の志をあらため
し。清浄潔白の人となさば。万に一ツ解除べきこともあらんか。足下の
為にわびさる冤魂。怨ミ報んとすれど。病人の命もや旦夕にせまり
ぬ。四と八とは我神力をもちひて崇む数なれば今日より四八三十二日
が間昼夜戸を閉。身心ときよらかにしてつゝしみ守らば。九死を出
て全からん。一時をあやまるとも脱るべからず。かく教へ筆を乞
とりて口のうちに祝詞をとなへつゝ病人の背にあまたの神号をかゝれ。又懐
より紙を出て書る神符あまた出してあたへ。此符を戸毎に貼し。兇悪を
悔て只一心に神明を念ぜしめ。おそるゝことなかれと教るに。左九郎夫婦おそれて且よろこ
び。米銭を以て謝しければ。祝部うけず只銭一文米一つまみを収て帰りぬ。

かくて神符を門に貼。窓に貼つけなどして守りけるが。その夜二更の比おそろし
き声して。冤や。うらめしといふに。にくき奴ばらかな。符文を設つるよ
としつ叫きてぞさけび声す。左九郎は終夜妻を守りつゝ。今やきたるべきと
魂も身にそはず。わなゝく夜明ぬればさまでおそるゝこともなくして。祝部が詞を奇なり
とし。ひたすら神明を念じておこたらざりしが。此夜は松風あらくふきごとく。怪き
つらなりて光かゝる夜の更るに。四更の比窓の紙にさと赤き光りさし
て。おそろしき奴らかな貼つる符といふ声きこゆ。涼しき夜なれいまだ
妻しばく。左九郎は毛髪さかだちければ竪て。あやうく死いりぬ。明ぬれば
くるを悲び。くらければ時をまちよろこびて。此日ごろとなることに千歳の
おくるよりも久し。冤魂は毎夜毎に家を見ぐり。或ひは屋の棟に叫び
ていかれる声夜ましに凄じく。かくして三十二日と云其夜になりぬ。今は

一夜にみさしぬ。かく夜ごとに睡られしが妻のいのちをまもるべしと。左九郎こゝに慎み守りてやゝ五更の天しらぐしと明らかなれば。今はこゝろやすき夢の醒るおもひをなし。ぐつすりとやすみて厨にいりて引窓をひらけバ。外面ハ明らかと思ひし夜ハいまだふかく。月ハ中天にかゝり影物すごく。ひや〳〵たる風さしふくにつれて。一團の陰火飛入るとみえしが屏風の裏に阿と叫ぶ声耳をつらぬき。おどろき屏風を押倒して座をきく。これハ妻がおのれにこそといそがしく屏風押しのけてみたれば。お塚ハつんえども病に腰たゝねば避逃べきやうハあらで隠るべき所もあらねば。いかにすへやと或ハあやしみ或ハおそるゝ。より火とりて彼所をみめぐりけるに。窓のあたり壁に腥く血そゝぎ流して地につく。されど屍も骨も見えず。

ず。月あかりにすかせバ軒の端に物あり。ともし火をさゝげて見るに。さけもちし女の髪の毛むらがりて外に家ぐるりのものもなし。浅ましくもおそろしさハ筆に尽すべうもあらねど。夜をあけて近辺を探索すれども。つひに其跡さへなかりければ。左九郎かなしミ歎ることかぎりなく。為に追薦仏事といとなミて。なき跡を弔ひけり。かくてなげく中陰すぎるが。お塚病に係りて或ハ医師をむかへ薬餌をもとめ或ハ僧をよび山伏をやとひ。加持祈祷すれども。しるし来銭を費しければ。小平次が残しおきける衣服雑器などなく売尽して。今ハ此家に住がたく。兄雲平が隠家にのがれていたるも弟のとるをと従ふべしと思案をさだめ。おし残りける家財厨の雑器まで。ことごとく売て金五両になし。ある日陸奥に下るべし


南無阿弥陀佛

しんまへ度して。空屋のうちに戻りけるが。時しも盂蘭盆のころなれば。せめて妻の新霊は此家にてむかへばやと。空屋の隅にかたちの霊棚をまうけ。僧をむかふべき便もなければ。みづから念仏をとなへて居る所に偏参の僧とみえける旅僧門に立てあな紙ぞふ。左九郎幸のことおもひうちにむかへ入れて我家に新霊あり。経をよませてたのまれしと乞ければ。僧うけがひてねんごろに経を読仏を念じとあり。家の四辺を見廻していひけるは。此家寃魂の妖祟ありて足下の命三日が出ずしてとらるべし。あな危しといふ。左九郎はこのことばをきゝおそろしきことにおもひて大にあはてうろたへすがりければ。さまざまに嘆て驚きけり。命を脱る術あらば救ひ玉へしとえさせよに。こゝに僧がいふ。足下の命を救んには。足下が命にもかへがたしと思ふ宝

あらでは術を施しがたし。左九郎頭をかたぶけしばし思ひて我ちかく他国にうつらんと思ひ。すでにことごとく家財を売て空屋となしたれば。命にもかふべき宝はおきて塵ばかりのものもなかし。只爰に家財を売たるあしの金あり。我今の身にとつては此金命にもかへがたきものなり。僧聞てそれこそはめでたけれさらばて。其金とさしそふる白紙を金の数ほど持来べしと云。左九郎よろこびて小判五両と白紙五枚とをもちて僧に渡しければ。僧これをとりて筆硯を乞て口のうちに呪文をとなへつ。小判の上に小篆籀のごとき文字を書き。一両づゝ白紙にて封じ。そのうへに又梵字を書あたへて云。足下これをもちて三日が間家を出ず斎忌してかくしおくべし。三日過ざるうちに必ず是を開くことなかれ。

ひさしくされハ術やぶれて忽一命をおとすべしとかたく教ふ。九郎か
しこみてうけたまはり。米銭を以て謝せられ。僧かたく辞して
うけず。つひに出去りぬ。左九郎深く旅僧のことばを信じ。其日
より身をきよめ精進して家にこもり。彼包金を懐にして慎しみ居
たれ。何のあやしむこともなくて已に三日迄をはりしぞ安らく心を安とめ。
かくて命をうばひとらるゝこともなくてよろこびし。彼金銀取出し封をきら
てみるに。いつの間にかすりかへられ金しみへみさね。左九郎大におどろき
扨ハ彼僧ハ拐児にて我をあざむき。金をかたり去るかとやる方なく
牙を咬拳をにぎりて憤りけれども。行方の者とも知らざれバいかんともせ
ることあたはず。いたづらに空を的にしむのみなり。彼金なくても陸奥よりく
ぐる路費ハさんこしあらき。家ハ空屋となしゝかれバ一銭にかへべき物

ぞなく。せんすべもなけれバ。人のすゝめにまかせて合力を乞ければ。これざに
うけがひけれど。ほどなく或日不忍池のあたりにて。偶彼賊僧に
いであひ。いきどほらしくいゝて。おのれ大盗人よく我をあざむきさて
金銀をうばひしよ。今速に金をかへさバ枉てゆるすべし。いなまバ
らぬにハ官府にひきて罪をたださんとせめけれバ。此僧大に恐懼
如意をあげて脳のあたりを志ゝかに打。左九郎ハうちたおされて
池のほとり尻居に撞とたふるゝが。渾身泥に染りてすゝくえ
ひよりあがりて。又僧をとらへんとしてよくみれバ。姿ハよく似たれども彼
うれ僧にハあらで別人なれバ大に驚き。地上に伏て誤を賠る
に。此僧眼をみひらきてさらバ人をかたらふも我を賊といへれし事
の面目をおとすなれバゆるしがたし。我一喝をうけて元身にこたへよ

といひつゝ。又かひなをあげて連打にうち面上に唾をはきかけてたちさりゆきぬ。又おんどうんええなれば往来の人これを見て。やうやく僧をよびてある しかりければ。左九郎はいそぎ打まして渾身あざれ。やうやく家に帰りつき 其儘床にふしけるが。其夜三更のころより大熱を発し。わなゝきて打 ふるゝ胸をかきむしりてみだして。夢中にさけぶ。されど来て我を水中 にひきいれて。ふとのまゝへ咽をしめるは。おそろしやかなしやと叫びつゝあり き息をくるしげにつき。手足をもがき溺死のごとく。ついに 其夜五更のころほひ狂ひ死に死しけり。嗚呼おそるべし。淫 婦お塚は三つの指をきられ狂人となりて。つひにあやしき死をとげし 姦夫左九郎は。家財を費し大あの今は賊徒にうばはれ。人にうとまれ て猶をうかれ。面上に唾をはかれ。池におちいりて泥に塗れ。水中に うち殺さるゝ人のごとくくるしみて空屋のうちに死し。家財雲散し 子孫も残らねまで。都是小平次が冤魂の所為にて。因果のことわり 報来りけり。此後雑劇に管的小平次が死霊の趣向をとる る人あれば。必怪事ありとて。雑劇の人はおそれはゞかりて語るなりとし。 ゆゑんはつゞるにあらず。世にきこえども。一老人の説話を聞。導善除 悪の一助にもとうつしまれしるしつけぬ

安積沼巻之四畢